

地方都市の親水空間整備をカタリストとした中心市街地再生に関する研究

徳島市新町川周辺を対象として

高山 達也

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

地方都市における中心市街地の衰退が問題視されて久しい。全国的に様々な活性化方策が企画、実行されてきたが、衰退から抜け出せていない都市も存在する。

近年、海外において注目されている「アーバン・カタリスト」¹⁾という都市再生手法がある。この手法は、スクラップ・アンド・ビルドのような手法とは異なり、対象となる場所に触媒になる要素を投入することで、周辺地域に変化を起し再生させる手法である。日本ではアーバン・カタリストと謳っていないプロジェクトであっても、結果としてカタリスト的効果を発揮し、都市に活力を与えた事例は多数見受けられる。

本稿で取り上げる徳島市新町川周辺は中心市街地の衰退が問題視される地区にある。1998年に完成したボードウォーク（木製遊歩道）により一時的に賑わいを集めたが、中心市街地の全てが活気を取り戻すには至らず、その影響は限られた範囲にとどまっている。しかし、近年ボードウォーク周辺を会場とした新たなイベントが企画され、賑わい創出に一役買っている。

本稿はカタリスト的事例として新町川周辺の取り組みに着目し、取り組み以前から現在までの過程と効果を時系列で明らかにすることで、日本型アーバン・カタリスト確立に向けた知見を得ることを目的とする。

1.2. 既往研究

新町川に着目した論文は数多く存在する。本稿はいずれの研究とも着眼点が異なり、カタリスト的効果について詳細に明らかにした事例は見受けられない。

2. 研究の概要

2.1. 研究の方法

本研究では、時代背景をつかむため、徳島市の中心市街地がどのように遷り変ってきたのかを統計データや文献など各種資料に基づき明らかにする（3章）。そして、新町川周辺の変容に焦点を当て、ボードウォークが果たしたカタリスト的効果をヒアリング・文献調査から分析する（4章）。近年の取り組みに着目し、主要なイベントの主催者にヒアリングを行い、現状と課題を明らかにする（5章）。各分析を総合的に考察し、

日本型アーバン・カタリストの確立に向けた知見を得る（6章）。表1にヒアリング対象を示す。

2.2. 徳島市と中心市街地の概要

徳島市は吉野川の三角州上に発達した都市であり、市内に138もの川が流れる。徳島市の大半は徳島平野に位置し平坦であるが、ほぼ中央には眉山がそびえている。中心市街地を図1に示す。中心市街地の核は内町と新町により構成されている。新町はかつて藍や砂糖の積出港があり最盛期には徳島随一の商業地を形成していた。しかし、現在では大型商業施設の誘致や徳島駅の改修に伴い内町が商業の中心地として位置づけられている。新町川は内町と新町の境界部に位置する。

3. 中心市街地の時系列分析

現在から遡ること約30年分のデータを収集、整理、可視化し都市の変容を明らかにする。

3.1. 統計データによる分析

統計データ（国勢調査、事業所企業統計、商業統計）を収集、データ化を行い分析した。徳島市を23地区に分割した23行政区を基に集計した。内町、新町の2地区の記載にとどめる（図2）。

内町では1983年そごう（27,000㎡）進出により売場面積が急激に増加し、商品販売額は緩やかに増加したが、2000年には急激に落ち込む。一方、新町は1980年以降徐々に商品販売額が減少する。これは表1 ヒアリング対象

プロジェクト・イベント名	対象団体
ひょうたん島周遊船	NPO法人新町川を守る会
ボードウォーク	中川建築デザイン室
パラソルショップ	(株)サーブ、中川建築デザイン室
マチ★アソビ	徳島県、徳島市商工会議所
徳島LEDアートフェスティバル	徳島市、NPO法人コモンズ
とくしまマルシェ	徳島経済研究所、(株)サーブ
アクア・チッタフェスタ	NPO法人アクア・チッタ

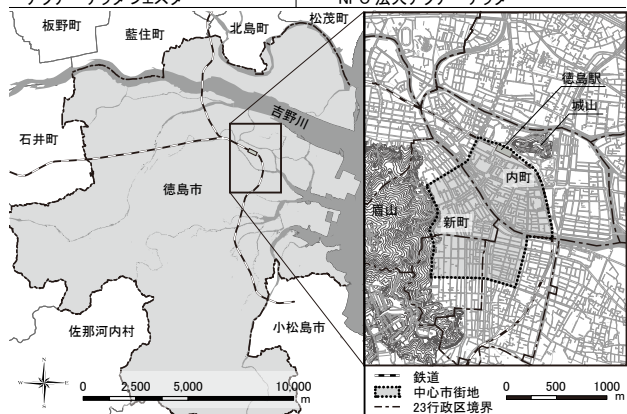


図1 徳島市と中心市街地

1995年丸新(7,898 m²)、2005年ダイエー(4,097 m²)という商店街の核をなす2大商業施設の倒産、撤退、県民の娯楽施設でもあった6つの映画館の閉館により客足が途絶え始めたことが要因と考えられる。

3.2. ハード的変容から見る中心市街地

紙面の都合上、都市変容に深く影響したと考えられる交通網の変容と施設変容のみ記述する。

3.2.1. 交通網の変容

バイパス道の整備、高速道路の開通、架橋等に注目し分析した。中でも明石海峡大橋(1998年)の開通は、片道2時間ほどで大阪や神戸に行くことを可能にした。併せて整備された高速バスにより、多くの県民が気軽に京阪神に買い物へ出かけるようになった(図3)。交通網が整備されたことは、皮肉にもストロー化現象を引き起こし、中心市街地の疲弊を加速させた。

3.2.2. 施設の変容(大型商業施設、映画館、駐車場)

10年ごとに地図を遡りデータ化し、大型商業施設

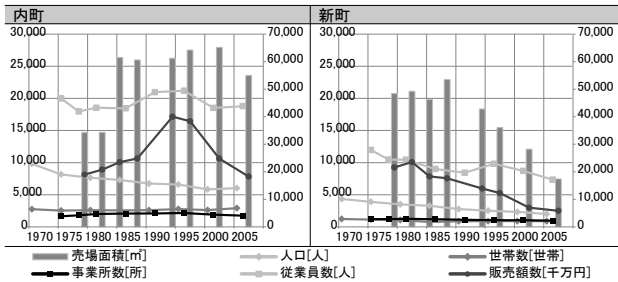


図2 内町と新町の時系列統計データ

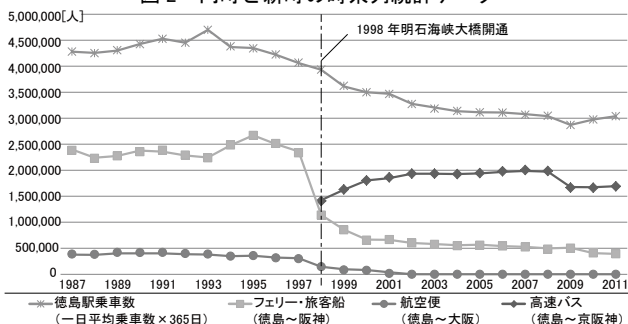


図3 交通網の変容(徳島～京阪神)

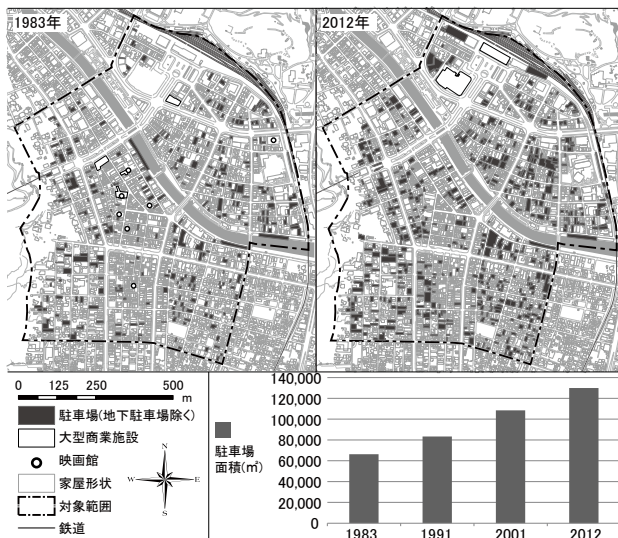


図4 中心市街地の施設の変容

と映画館、駐車場の立地について分析した。データ化に際し、2009年のZ-mapを基に、各年毎にゼンリン地図をGISにプロットした。特に駐車場に関しては、GIS上で面積計算し、広がり具合を算定した(図4)。1983年と比べ2012年には、駐車場は2倍以上に拡大している。大型商業施設が増加している内町に比べ、新町では集客力のある大型施設は次々と消滅した。2012年3月にアニメを中心に上映する映画館が開館するまで、約6年間市内に映画館は存在しなかった。店主の高齢化、跡継ぎ問題などから商店街の半数近くが閉店し、空き家や駐車場は増加の一途で、新町はシャッター街化している。集客施設の跡地には高層マンションが建てられ、街の様相に変化を与えている。

4. カタリスト分析

4.1. 新町川整備前の状況

昭和36年の台風で甚大な被害を被り、護岸にコンクリート製パラペット堤を築いた。水運の衰退も重なり、市民の生活は川から離れていく。護岸の多くは駐車場となり、水辺空間は都市の裏側へと退き、人が滞留しない場所となった。工場排水や家庭排水の流入により川は汚れ、魚も棲めない悪臭漂う川となった。

4.2. 新町川整備の変遷

汚れてしまった川をきれいにするとともに、再び川に人々を近づけるために様々な整備が行われた。変遷を平面・断面の変化とともに図5に示す。

浄化事業に始まり、水際公園、護岸整備、ボードウォークと1990年前後に相次いで整備された。

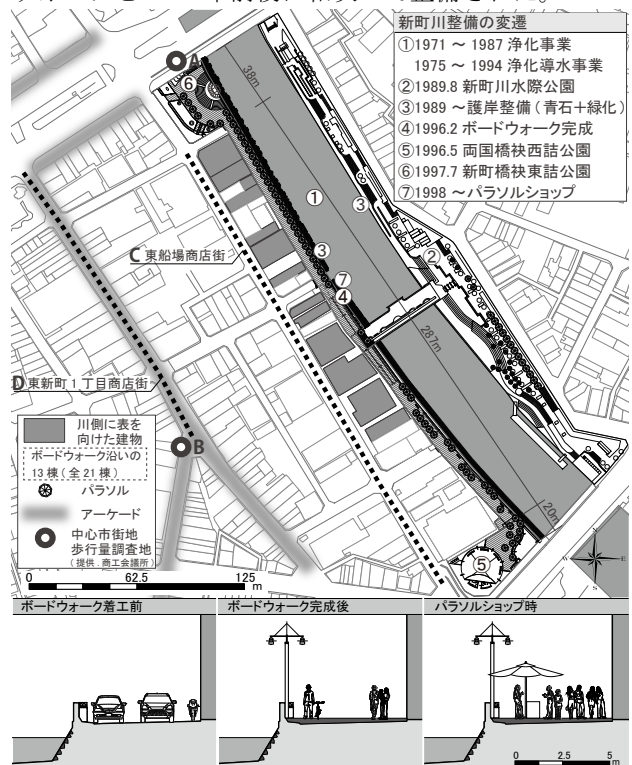


図5 新町川整備の変遷

4.3. カタリストの概要

新町の活性化を目的に内町からの人の流入を狙って計画されたボードウォークとパラソルショップの2つに焦点を当てカタリスト効果を分析する。

4.3.1. しんまちボードウォーク

水際公園完成により川辺に足を運ぶ市民が増加し、その流れを新町まで引き込む狙いでボードウォーク構想が誕生した。1995年に県や市とともに東船場ボードウォーク整備事業を実施し、河岸に木製遊歩道を整備した。しんまちボードウォークは、総延長287mの東船場ボードウォークとその両端の公園から構成される。完成前後の写真を添付する(写真1)。以前と比べ視線も抜け水辺と近くなり、川辺の環境は一変した。

4.3.2. パラソルショップ

パラソルショップは、図5のようにパラソルをボードウォーク上に設置し、そこで物品等の販売を行う仮設商店街のようなものである。パラソルショップの開始によってさらにボードウォーク周辺の賑わいは高まった。しかし、その賑いも長く続かず、プロアマ問わない出店や客のニーズとのミスマッチ等のために売上は減少、規模は縮小していった。

4.4. カタリスト効果の分析

4.4.1. 人の流れの変化

徳島市中心商店街通行量調査の結果を抜粋する(図6)。新町川周辺地点の休日歩行量は1996年に比べ、1999年は増加している。これはボードウォークの建設とパラソルショップの実施による効果であると考えられる。県営駐車場(河川管理用通路)をボードウォーク(都市公園)としたことで、飲食や物品の販売が可能となり、利活用の幅が広がった。しかし、徐々に減少傾向を示し、その効果は一時的であったとみられる。



写真1 新町川整備の変遷

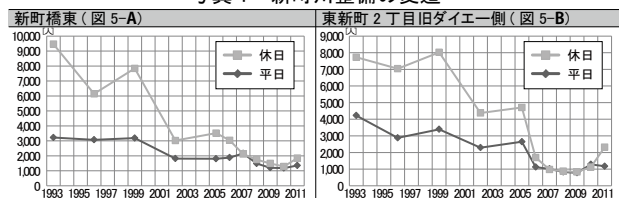


図6 ボードウォーク周辺の歩行者数の変遷

4.4.2. 周辺施設の変容

ボードウォークの完成によって川側に表を向けた建物が増加した(図5)。現在では13棟が川側にも店舗や入口を構えている。東新町の方へ通り抜けられるように改築された建物も存在する(写真2)。これには、ボードウォークがみなし道路として接道条件を満たせたこと、パラソルショップにより川側に賑わいが生まれたことが大きく関連している。また、ボードウォーク沿いの東船場商店街では店舗の増加がみられた(図7)。近隣商店街の店舗増加には至っておらず、効果はあまり広範囲に及ばなかったと考えられる。パラソルショップから独立し、商店街内に店舗を構えるといった波及効果もあった。独立した店舗が26店舗あり、その内周辺商店街には14店舗が出店している。

5. ボードウォーク周辺を会場としたイベントの調査

近年、ボードウォーク周辺でのイベント数が増加し、特徴的な取り組みや集客力の高さが注目を集めている。イベントとカタリストの関係性に着目し、現状と課題を明らかにする。

5.1. イベント数について

継続的に実施されているイベントだけでも年間145回もの開催があり、週末をターゲットにしたボードウォーク周辺の賑わいが特徴的である(表2)。

5.2. 主要イベントへのヒアリング

主要なイベントの関係団体に対してヒアリングを行った。対象は、ひょうたん島周遊船、徳島LEDアートフェスティバル、マチ★アソビ、とくしまマルシェ等で、ボードウォーク周辺を会場として行われているものに限定し記載する(表3)。開催場所を図8に示す。

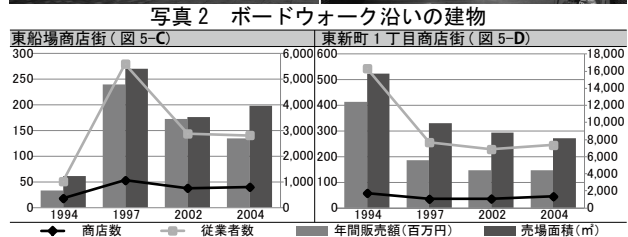


図7 ボードウォーク周辺商店街の商業統計

表2 ボードウォーク上のイベント数

イベント名	開催時期	使用回数	初回開催年
パラソルショップ	土日祝日	120回程度	1998年
とくしまマルシェ	毎月最終日曜日	12回	2010年
マチ★アソビ	5月、10月 各3日間	6回	2009年
阿波踊り	8月12日～15日	4回	1996年
はな・はる・フェスタ	4月下旬 3日間	3回	1998年
計		145回程度	

表3 ボードウォーク周辺の主要イベントについて

	a) とくしまマルシェ	b) 徳島LEDアートフェスティバル	c) マチ★アソビ	d) ひょうたん島周遊船
開催期間	2010.12～毎月最終日曜日 計25回 台風のためH24.9.30のみ中止	2010[2010.4.17-25]9日間 2013HOP[2012.4.20-22] 2013STEP[2012.10.26-28] 2013[2010.4.20-29]	2009秋:10.10-12 2011春:5.3-5.5 2010冬:1.16-31 2011秋:9.23-10.10 2010春:5.2-4 2012春:5.3-5.5 2010秋:10.9-11 2012秋:9.22-10.8 2011冬:1.22-2.6	毎日 午後1時～4時 (7・8月は午後5時～8時)
内容	徳島県の選りすぐり農産物・食べ物が集まり販売、試食等が行われる。	LEDを用いたアートイベント。街中に作品が展示され、音楽祭なども開かれる。	ufortableが企画するアニメイベント。街中でアニメ関連の展示・イベントが行われる。	ひょうたん島の周囲6kmを船でまわる30分の船旅。
主催者	とくしまマルシェ事務局	徳島LEDアートフェスティバル実行委員会	アニメまつり実行委員会(他開催回により変動)	NPO法人新町川を守る会
来場者数	平均来場者数12,000人	2010 : 200,000人 2013 HOP : 13,000人 2013 STEP : 40,000人	2009秋:12,000人 2011春:20,000人 2010冬:21,000人 2011秋:50,000人 2010春:18,000人 2012春:40,000人 2010秋:20,000人 2012秋:52,000人 2011冬:25,000人	2003:14,176人 2008:31,157人 2004:13,580人 2009:39,855人 2005:20,284人 2010:41,803人 2006:18,407人 2011:39,817人 2007:26,879人 2012:35,792人(7月まで)
カタリストとの関連	運営主体に長年パラソルショップを運営してきた人材を起用。ボードウォーク及び中心市街地の活性化とパラソルショップの再生が目的の一つ。	新町橋東袂公園にてイベント 両国橋西袂公園にて仮設展示 パラソルショップを屋台等に活用	新町橋東袂公園にてイベント パラソルショップをグッズ販売のブース等に活用	周遊船自体に直接関連は見受けられない。NPO法人新町川を守る会のイベント等で新町橋東袂公園を利用。
波及効果	近隣飲食店や百貨店での売上上昇 周辺地域におけるイベントの増加 とくしまマルシェを通じてのマッチング	橋のLED装飾 期間中の空き店舗、空き地の利用 テラコヤ(常設LED教室)の開設	アニメ産業の活性化(商店街内に映画館が復活、アニメ関連飲食店等の増加) 期間中の空き店舗の利用	他のイベントとのコラボレーション (徳島LEDアートフェスティバル、マチ★アソビなど)
写真				

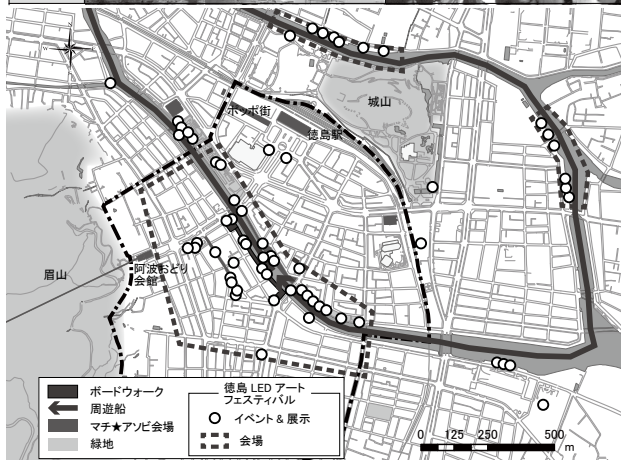


図8 イベントの会場(中心市街地周辺)

いる。運営主体に長年パラソルショップの運営をしてきた人材を起用し、ノウハウの蓄積を活用している。近くの飲食店や駅前百貨店では開催日に売上が上昇するなど、周辺地域への波及効果もみられる。

b) 徳島LEDアートフェスティバルは仮設の作品だけでなくLED整備事業として新町川周辺の橋や公園内に常設LEDアートを展開している。空き地や空き店舗を展示会場、パラソルショップを屋台等として有効活用している。特に、新町や新町川沿いでのイベントや展示が多い(図8)。また、LEDテラコヤというLEDの学習施設をボードウォーク沿いに開設した。

c) マチアソビは中心市街地一帯を使って行われており、パラソルショップはグッズ販売ブース等として活用されている。マチアソビの企画をするアニメ会社はボードウォーク沿いにスタジオとカフェを構え、アーケード内に映画館を復活させるなどアニメ産業を活用したまちの活性化に貢献している。

d) ひょうたん島周遊船は毎日運航されており、近年来客数が増加している。また、LEDアートフェスティバルやマチアソビとの連携を行い、川をイベント会場として活かす役割を担っている。周遊船の運営主体で

あるNPO法人新町川を守る会は、川の清掃や川を利用したイベントを一年を通して行っている。

ボードウォーク周辺は様々なイベントの会場として今も活用されている。パラソルショップは仮設性を活かし、屋台や販売ブースとして利用されている。また、ヒアリングをする中で、各イベントに関わる人達が相互に連携していることが確認できた。イベント間のコラボレーションや運営等に活かされている。イベントが集中する休日の賑わいは戻りつつあるが、平日はまだ閑散としており、今後の課題といえる。

6. 考察・総括

本研究では、以下のことが明らかになった。

- 1) ボードウォークとパラソルショップによるカタリスト的効果として、周辺地区への人の流入や川側に表(顔)を持つ建物の増加、周辺地区における商店の増加といった効果がみられた。川を表として活用するためのハードとソフトの整備が、カタリスト的効果の創出に大きく影響していると考えられる。
- 2) 人の流入や商店の増加といったカタリストの効果は一時的であった。しかし、川側に表を向けた建物が増えるといったハード的な効果は今でも残っている。一時的であるカタリスト効果をより活かすために、継続的な活動を行っていく必要がある。

川という中心市街地の潜在的な魅力を、地域と行政が一体となりまちづくりに繋げていることが新町川周辺で行われる一連の取り組みの特色である。地域の潜在力に目を向け、それを活かすように地域一丸でまちづくりに取り組むことは、ますます人口や経済規模が縮小していく地方都市にとって一つの再生手法の在り方であると考えられる。

参考文献

- 1) Wayne Attoe and Donn Logan, American Urban Architecture: Catalysts in the Design of Cities, University of California Press, 1989